

リンゴの木の上のおばあさん

ミラ=ローベ作 塩谷太郎訳



昭和四十四年十一月十日
初版発行
四刷発行

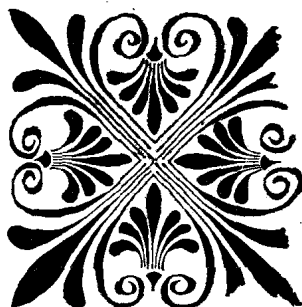
NDC 943

ミラニローベ

リンゴの木の上のおばあさん

新しい世界の童話シリーズ・34

訳者の了解より検印廃止



訳者 ■ 塩谷太郎

発行人 ■ 古岡秀人

編集人 ■ 石井和夫

本文印刷 ■ 信毎書籍印刷株式会社

オフセット印刷 ■ 株式会社恒陽社印刷所

製本 ■ 株式会社国宝社

発行所 ■ 株式会社学習研究社

東京都大田区上池台4の40の5

振替東京14 25 30

G 024-334

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

定価
四二〇円

この本についてのお問合せ、製本上のミスなどがありましたら、下記宛にお知らせ下さい。
学研「営業総務部サービス課」児童図書係 東京都大田区仲池上1の17の15 Tel.03-753-7531

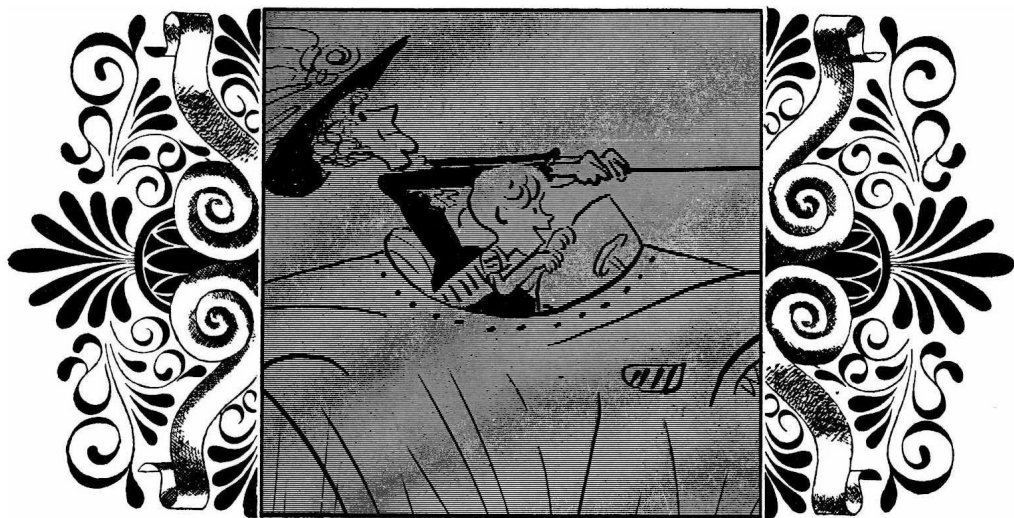
リンゴの木の上のおばあさん

ミラ＝ローベ作

塩谷太郎訳

ズージ＝ワイゲル画

DIE OMAMA IM APFELBAUM





リンゴの木の上のおばあさん もくじ

5 ひとりぼっちのアンディ

18 とつぜん、あらわれたおばあさん ●

44 書きとりの練習^{れんしゅう}

57 野馬狩り^{のうまが}

A stylized, black and white illustration of a woman in a black dress and a large, ornate hat, holding a cigarette. The illustration is framed by decorative scrollwork at the top and bottom. The woman is depicted in a dynamic, slightly twisted pose, looking towards the right. Her hat is large and features a wide brim and a tall, pointed crown. She is holding a cigarette in her right hand, which is raised towards her face. The dress is a simple, black, sleeveless garment. The background is a light, textured gray. The entire illustration is enclosed within a rectangular frame, with decorative scrollwork elements at the top and bottom.

ア
ホ
ー
イ
！
船長せんちよう！

二十二番地のおばあさん

ベロのいたずら

アンデイ、ジャガイモをゆでる

花だんづくり

●編集委員

<50音順>

独・北欧児童文学翻訳家 大塚勇三

青山学院大学 講師
英米児童文学翻訳家 神宮輝夫

国立音楽大学 教授
フランス児童文学翻訳家 塚原亮一

慶応義塾大学 助教授
英米児童文学翻訳家 渡辺茂男

DIE OMAMA IM APFELBAUM

Mira Lobe

Original German edition published

by Verlag Jungbrunnen, Wien

Copyright 1965

by Verlag Jungbrunnen, Wien

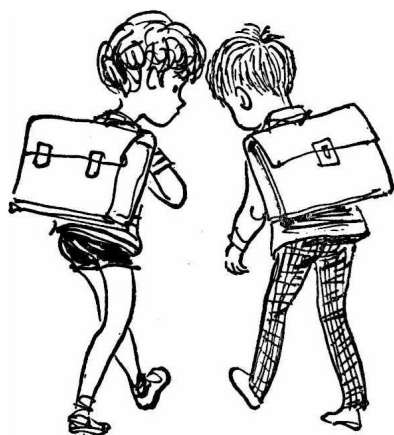
Japanese translation right arranged
through Charles E. Tuttle Co., Tokyo

●訳者のご紹介

この本を訳された塩谷太郎先生は、1903年に群馬県に生まれ、東京外国語大学ドイツ語科をご卒業になり、現在は日本児童文芸家協会・日本児童文学者協会会員で、海外児童書の翻訳・研究につくされています。

主な訳書に『バンビ』、『ハウフ童話集』等があります。

ひとりぼっちのアンディ



その通り^{とお}にすんでいる子どもたちには、みんなおばあさんがいました。なかには、ふたりもいる子^こもいました。ひとりもないのは、アンディだけです。そのためアンディはよく、くやしい思^{おも}いをしました。きょうもそうです。

朝^{あさ}、学校^{がっこう}へいく道^{みち}で、アンディは五、六けんさきにすんでいる、友^{とも}だちのゲールハルトに会いました。

「きょう、おひるすぎ、ぼくんとこへあそびにこない？」と、アンディはききました。「リンゴの木^きにあがって、テントをはろうよ。」

「きょうはだめだよ。」と、ゲールハルトはいいました。「おばあちゃんとメリーゴーラウンドへいくんだから。」

アンディはちくりとむねをさされたような気がしました。ゲールハルトが木馬もくばの
つて、ぐるぐるまわっているところをそうぞうしてみました。馬うまは上うへへ下したへとゆれ、
それにあわせて音楽おんがくがなっています。下したではおばあさんが、ゲールハルトが前まえをと
るたびに、手てをふっています。

アンディのもうひとりの友ともだちは、ローベルトといって、ふたりはおなじこしかけ
にすわっています。やすみ時間じかんに、アンディはじぶんのバターつきパンを、ローベルト
のラードをつけたパンと、とりかえっこしました。

「きょうおひるすぎ、ぼくんとこへあそびにこない？ リンゴの木きにあがって……」

「きょうは、お客きやくさまがくるんだよ。」と、ローベルトはいいました。「アメリカからお
ばあちゃんがきてるんだよ。トランクにいっぱいおもちゃをもってきたんだよ。おば
あちゃん、ぼくに『こんにちは、ローベルト』っていうかわりに、『ハロー、ボビ』

っていうんだよ。」

「どうして？」と、アンディはききました。「どうして、『ハロー、ボビ』なんていうの。」

「アメリカじゃ、『ローベルト』のことを『ボビ』っていうんだよ。それから、『こんにちは』ってのは、『ハロー』っていうんだよ。おばあちゃん、ひこうきにのってきたんだよ。」

またちくりです。やすみ時間じかんがおわり、ローベルトは、あした、トランクにどんなおもちゃがはいっていたか、くわしくおしえてくれるとやくそくしました。

そんなわけで、午後アンディはひとりでリンゴの木きにのぼっていました。この高いみどりのかくれ場所ばしょは、とてもいいかんじでした。おまけに、なかなかべんりでした。リンゴの木きは、家いえと通りとおにはさまった庭にわにたっていて、木きの上うえからは、なんでも下したのものが見みえますが、はなたいに、通りとおからは、木きの上うえにいるアンディは見みえません。でもよく見みると、しげみのあいだから、二本ほんのはだしの足あしがぶらぶらしているの

が見え^みました。そして下^{した}の草^{くさ}のなかには、ほこりだらけの子^こどもぐつがおいてありました。

アンディはテントにするため、テーブルクロスをもつてあがっていました。でもひとりでは、テントをはる気^きもしません。テントだけでなく、なにもする気^きがしませんでした。

アンディは、メリーゴーラウンドのおばあちゃんといっしょのゲールハルトや、ハロー・ボビのおばあちゃんといっしょのローベルトのことをかんがえていました……すると、もうこんな木^きの上^{うえ}になんかいられなくなりました。アンディは木^きからおりると、家^{いえ}のほうへかけていきました。

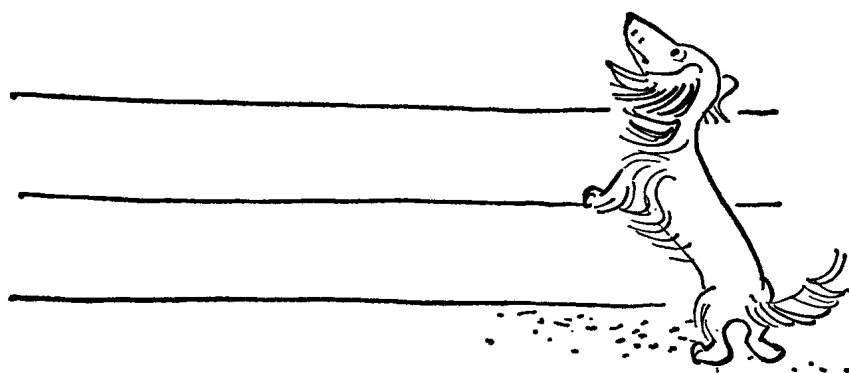
アンディのおかあさんは、ベランダのかいだんのいちばん上^{うえ}にすわっていました。ダックスフント（^{足が短い犬}）のペロをひざの上^{うえ}にのせて、毛^けにブラシをかけてやっています。

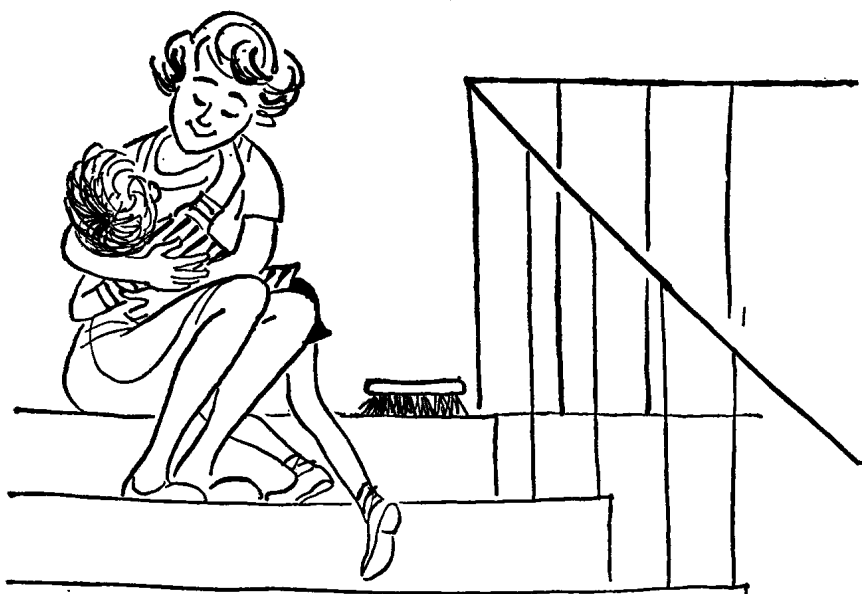
ほんとうは、まい日^{にち}ペロにブラシをかけてやるのは、アンディのねえさんのクリス



トルの仕事しごとでした。でもクリストルは、いつもわすれましたから、おかあさんがしてやらなければならなかったのです。おなじように、アンディのいさんのエルクも、くつをみがくのをわすれましたし、アンディも金色きんいろハムスター（チマウセンネ）にえさをやるのをわすれました。もし、おかあさんがすべてに気きをくばっていなかったら、金色きんいろハムスターはもうとくにうえ死じにしていたでしょう。くつはよごれっぱなしになっていたでしょう。そしてベロは、もうきれいなきぬのようなつやのある毛け長ながダックスフントではなく、ワイヤヘアードのようなもじやもじやした毛けの犬いぬになって、かけずりまわっていたことでしょう。

アンディは、おかあさんとならんでこしをかけました。





「うちには、どうしておばあちゃんがないの。」と、アンディはききました。

「しってるはずでしょ、アンディ。ひとりのおばあちゃんは、パパがまだ小さいときになくなってしまったの。ずっとずっとむかしのことよ。それから、もうひとりのおばあちゃんは、アンディが生まれるすこしまえになくなったのよ。」

「それもずっとずっとむかしのことなんだね。」と、アンディはいいました。

おかあさんは、もうすんだのよというしるしに、ぼんとペロをたたきました。そして、アンディをひざにのせました。

「おばあちゃんがいないくては、こまるの?」

アンディはうなずきました。

「みんな、いるんだよ。ゲールハルトもローベルトも……みんな。」

おかあさんはアンディをかかえて、赤ちゃんのように、すこしゆすりました。

「でもアンディには、パパもママもエルクにいさんもクリストルねえさんもいるでしょ。それだけじゃたりないの?」

「それからベロもだよ。」と、アンディはいいました。

ベロはしっぽをふりながら、かいだんのいちばん下^{した}にたつて、上^{うへ}を見あげ、じぶんもゆすってもらいたそうにしました。

「ゲールハルトのおばあちゃんは、」と、アンディはしゃくにさわるようにいいました。「メリーゴーラウンドでもおぼけ汽車^{きしや}でも、どこでもゲールハルトの　きたがる　ところへつれてつてくれるんだよ。それからクリスマスには、とんがりぼうしをあんでくれたんだよ。」

「アンディ。」おかあさんは、ゆずぶるのをやめていいました。「あんたのようふくだんすには、ぼうしが三つはいつているわね、ちがう？」

ちがいません。ぼうしはじゆうぶんあります。ふるい青いのは、エル、こいさんのおさがりです。ふるい赤いのは、クリストルねえさんのおさがりです。まだかなりあたらしい白いのは、アンディのおたんじょう日に、おとうさんとおかあさんが買ってくれたものです。でもデパートで買ったぼうしは、おばあちゃんがあんでくれたものとはちがいます。

「ほしければ、」と、おかあさんはいいました。「ママが、ゲールハルトとおなじのをあんであげますよ。」

アンディはくびをふりました。おかあさんにあんでもらうつもりなんかありませんでした。おかあさんには、いっぱいすることがありました。朝、六時半におかあさんは家をでて、おひるまで大きなせんたく屋さんではたらいていました。おもいせんたくもののつつみを、はかりにのせたり、おろしたりする仕事で、なかなかほねがおれま

した。そしてうちへかえってくると、いよいよほんとうの仕事がはじまります。お料理をつくったり、へやをかたづけ、電気そうじ機をかけたり、アイロンをかけたり、エルクにいさんの勉強をみたり、ベロにブラシをかけたり……、だめです。おかあさんには、とんがりぼうしをあんでるひまなんかありません。……それも、もう三つも、ぼうしをもってる子のために。

「こんどの土曜日の午後、ゆうえん地にいてみましょうね。」と、おかあさんはいいました。「パパとアンディとママとで。そしてメリーゴーラウンドにのりましょう。」アンディは、だまっていました。アンディは、おとうさんもおかあさんも、ゆうえん地へいくのはすきでないことをしていました。おかあさんはのりもののにと、めまいをおこします。おとうさんは土曜日には、庭にすわっているのが、いちばんすきです。

おとうさんは、おばけ汽車なんてくだらない、こわいゆめをみるだけだっていっていましたが、それはほんとうです。アンディは、このまえエルクにいさんとおばけ汽車にのった晩、よくねむれないで、ゆめのなかで、おばけ汽車にのったときより、も

つとこわい思おもいをしました。それでも、またのってみたかったです。

「いらっしやい。」と、おかあさんはいって、たちあがりました。「あんたのおばあちゃんを見みせてあげるから。」

ふたりはベランダをとおって、居い間まにきました。ピアノの上うへには、がくにいれた、アンディの小さいときの写しゃ真しんがのせてありました。きょんとした目めをして、おもちやのウサギをだいています。おかあさんはアルバムのなかから、一まいの写しゃ真しんをさがしだして、がくにいれかえ、ピアノの上うへにおきました。

「ほら、これでアンディにも、おばあちゃんができたわ。」おかあさんは、アンディをピアノのいすにのせて、ぐるぐるまわし、高たかくしてくれました。まるで、メリーゴーラウンドにのっているみたいです。

「ほら、見みてごらん。すてきなおばあちゃんでしょ。」

おばあさんの写しゃ真しんをいれるため、じぶんの写しゃ真しんがだされてしまったのは、ちょっとしやくにさわりましたが、アンディはおもしろそうなおばあちゃんだなあと思おもいました。